
Blue sky

空高おまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue sky

【Nコード】

N0960K

【作者名】

空高おまめ

【あらすじ】

小学生時代、不登校になった少女には彼女を支えてくれる恩師がいた。

恩師との十余年ぶりの再会を前に大人となった彼女の追憶と再会へ向けた想いを綴る短編小説。

長い石畳が上がっていく。大分登ってきたのにまだ曲がりくねって石畳は続く。

何処まで続くのか？何処で終わるのか？

ズッシリした鞆が恨めしいだが、登らねばなるまい。

目的地は此の坂の先に在るのだから。

「好きな事をやって好きな場所で死にたいよ、それが幸せやと思うんよ」

むかし、担任は私にそう言った。もう、その詳細の記憶はいまでも忘れる事無く私の中に刻み付けられている。

沢山の選択肢の中で道を見失った時、自信が無い選択の時私はこの言葉にしたがった。好きな事を選ぶのだ。いつ死んでも良いように私は未だそう言った時の先生の顔をしっかりと覚えている。穏やかな、そして何かを切願する様な顔だった。

あの時先生が切願した何かは私には未だ見えない。

——今年私は二十三歳になる。

あれは私が一年間家に閉じこもった年、今から十二年前の話だ。閉じこもったきっかけはある事件だった。だが綴ったところで納得出来るような理由は提供できなからう。だから割愛するが、今からすれば大した話でも無かった。

ただ、少し疲れていたんだ、いまではそう思う。

それが先生のあの言葉を聞くきっかけになった。

先生と会う事になった経緯を詳しく覚えてはいない。学校を休み続ける私を励まし、学校に来る様に説得する為に来たのかも知れない。とにかく我々は我が家の古いコタツで面会したのだ。

彼女は橘先生といった。五十歳程度の線の華奢な女性だった。歳を感じさせる事なくいつもさかさか歩いて後ろをついていく生徒達を小走りにさせつもさかさか歩いて後ろをついていく生徒達を小走りにさせ、たまに開催するクラス会のコントで大声で楽しそうに笑った。穏和だが怒ると少し怖い、そして明朗な先生だった。

先生は私の向かい側に腰を下ろすとニコリと笑って、初めましてといった。ちょうど二月の末で学年末が近かった。

先生は「来年は私が担任だから宜しくね」と手を差し延べて握手を求めた。私は彼女の勢いのままに握手に応じた。温かい優しい手だったのを覚えている。

彼女はその後改めて母に挨拶をした。その後何度も聞かされた話を始めた。内容は大した話では無い。“集団に適応しにくい時期”だとか“周りとの相性”だとか“彼女の意志”だとか……そんな言葉の連続だった様な気がする。

ひとまず話を終えて先生は母に大丈夫ですよ、と笑い掛けた。毎日私が学校に戻る事を祈ってくれる可哀相な母はその言葉に力無く笑った。

母はその言葉に幾度と無く裏切られてきた、私は頑として登校を拒

否し、母は希望の言葉を信じられなくなっていたのだ。あの時の母は軽い鬱だったはずだ。

無意味な励ましの後、先生はそっと私を見据えた。

真直ぐな真摯な眼だった。先生の顔は傾き始めた陽の光に照らされて静謐な何かがそこには在った。もしかしたら彼女はその時ちよっとした覚悟をしていたのかもしれない。

そして言った。

「八坂さん。私と少し二人だけで話をしませんか」

「できればお母様にはご一緒に欲しく無いのです。八坂さんと話して八坂さん本人の話を聞きたいものですから」先生は毅然として母に言った。母は少し驚いて私の顔をみた。私は戸惑い、どうするべきかも判らずにうつむいたのを覚えている。

「判りました。では、私買い物に行つて参ります。穂希^{ほまれ}、先生に白茶をもう一杯お出ししてね。もう冷めていいだろうから」しばし母は考えてから出し抜けにそう言った。

「はい」と答えて私は台所に向かった。

私が臨時の客間のリビングに戻ると母は「じゃあね、二時間位出てくるから」と家を出ていった。

お茶を出し直すと先生はニコリと笑つて私の淹れたお茶を啜った。

「美味しいお茶ねえ。八坂さんはお茶好きかしら」そんな話題から私達の会話は始まったのだ。

最初の十分はお茶の話に費やされた。彼女は大の緑茶党で紅茶はまだしも、コーヒーマンかは許せないと豪語した。その場にコーヒーマン党の人がいたら大論争になったに違いない。

その後も話題は五分ごと位に変わり続け、私たちは互いに好きな食べ物や本、芸能人、テレビ番組、音楽について話してその魅力を語

った。

気が付けば自分でも意外な程楽しい時間を過ごしていた。

先生は若い頃からヨーロッパが大好きで特にイタリアがお気に入り、新婚旅行で行ってみたかったが諸事情によって断念、結婚後十年を記念して出掛けたイタリアの町並みに惚れ込み今では夫婦で休みにイタリア語教室に通っているのだという話だった。

「素敵やね。私には出来そうも無いけど」

「あら、簡単よ。好きだからこそ出来る部分は大きんやけどね」

「好きだから……か」

先生は何も言わずに冷めてきた緑茶を飲み干した。そしてカタンと音を立てて湯飲みをコタツに置いた。

八坂さん……、そう言って先生は真剣な表情を再び顔に浮かべた。

「貴女がしたい事って何やのん。好きな事はなあに」

「え、」私は思わず口ごもった。

「私は退職してからもっとイタリア語を学ぶつもりやよ、夫と一緒にね」

「……」

「それから二人で向こうに家を買って移住するんよ」

「……」私は何も答えられなかった。

そうして先生は、貴女判ってるはずよと私に言った。

「貴女が何を望むにしろ、何をやるにしろ、貴女は自分であらゆる事を決める知識や技術が必要だよ。いま貴女と話して確信したけど八坂さんはきちんと自分の中でそれが判ってるやろ。技術だけじゃなくて、人間関係も――」

「でもッ……」私は必死で先生を遮った。

「でも……どうしたの」

「………」

「不安？」

「――はい」

「貴女があの子たちの友情を終わらせた訳じゃ無いやない。むしろ彼女達でさえ貴女が登校する事を望んでるわよ」先生はゆっくりとバックからハンカチを取り出した。

「ほら、使って。せっかく別嬪さんやのに」

いつの間にか両目から玉みたい涙がポロポロこぼれ落ちていた。先生が差し出す綺麗なレースのハンカチを汚すのが忍びなくて私は側に在ったティッシュボックスを引っ掴み、「これあるし平気！」と声を上げた。

その様子が面白かったのか先生は声を上げて笑った。釣られて私も泣きながら笑う。傍から見れば変な光景だったに違いない。

「さっき話した時八坂さんは遊びは缶けりが好きやってゆうたね？でも、缶けりは家で一人ではできひんよ。実は八坂さんも外に出て、皆と会いたいんとちゃう？」

「………」

「子どものこの時期の時間って、ほんまに宝もんみたいなもんやと思うんやよ。私にも息子と娘がいるから判る。まあ、あの子らはもう成人して家庭まで持つてるんやけど」

「………」

「八坂さん。一度休み始めて、引っ込みつかん様になったんやね。そうしていつの間にか学校にアレルギーを持ってしもたんや無いかしら？」

「………」

「お母様は心配してはるけど、それを何とかできるんは八坂穂希貴ほまれ女しか居ないんよ。希望の言葉はもうお母様を元気付けてはくれへん」

先生は判っていた。母の状況を、私の心を。

「私はね、」

彼女は少し困った顔をして静かに言った。

「好きな事をやって好きな場所で死にたいよ、それが幸せやと思うんよ」

スルリと“死”と彼女は言った。

そして先生の表情は優しくてそして切ない趣に変わった。

「後悔はしたくない、そうやろ？」

「学校に……行きます」

即決だった。

自分でもびっくりした。それぐらいに唐突で無意識な選択だった。

「そのかわり！先生の撮ったイタリアの写真をください！綺麗なやつ！」

どうしてこんな流れになったのか全く判らなかった。

そして今も判らない。

ただ、その運命の一言で私の中の厄介な呪いはフワリと解けていった。それだけは間違いない。

先生は私に、まだほんの子どもだった私に、自分の人生観を見せてくれた。子どもの視線で語りながらも私を大人の様に扱ってくれた。思春期の入口に立とうとする私にとってそれがどんなに革新的なものだったか、今ならそれが良く理解できる。

先生は空色のバインダーに沢山のイタリアの風景を入れて私にプレゼントしてくれた。

そして私は新学期を待たずして学校に復帰したのだ。

先生は復帰後の私の衰退した学力向上に献身的に付き合ってくれ、母や周囲への気配りも怠る事無く、私を無事に卒業させた。

それから彼女の存在と言葉はこの十余年あまりの間私を支え続けてきたのだ。

だが、年賀状で取り続けた橘先生との連絡が遂に去年途絶えてしまった。

元日を一週間余り過ぎてても来ない年賀状に私は切ない悲しみを覚えた。

だから今年の正月に年賀状が届いた時は思わず声を上げて喜んだ。それも、例年とは違ってエアメールだったから驚きと感動はひとしおだった。イタリアからはるばる日本へ。いかにもな縁取りの封筒に恩師の滑らかな筆記体の文字……。

思わず部屋の片隅の本棚の最下段に眼をやった。少し色褪せてはしまったがその背表紙は変わらず水色、特別な一冊だ。

去年、介護していた御歳九十歳の義母が年末に亡くなり、直ぐにイタリアへの移住を決断したそう。義母の遺言は介護を続けてくれた嫁への感謝とイタリアへの移住を勧めるものだったという。今年の秋に無事移り住み、生活にも慣れ始めたところらしい。そして、二枚目の便箋を繰ったところで私は瞳を見張った。

——大学も卒業ですね。もし宜しければ卒業旅行にイタリアに来ませんか？歓迎しますよ。

先生の住む街は聞いた事も無い名前だった。どうやら小さな町らしい。

先生らしいなと思わず顔がほころんだ。

こうして私は今、石畳の坂をキャリーバックをひいてトランクをガタガタいわせて登っている。

先生はどんな顔をするだろうか？旦那さんはどんな人だろうか？

お土産の自家製梅干しは気に入ってくれるかしら？きつと気に入ってくれる。イタリアではろくな梅干しが無いってメールで言っていたから。

そんな沢山の期待と不安でフワフワしながら坂を往く。

フワフワと言っても鞆が重くて、正直苦しかったりする。

イタリアの春の日差しは明るくて空は鮮やかな朝日に彩られている。道の両脇の家は優しい色合いの民家が続く。

——表札が目に残まるはずだから、メールにはそう書いて在った。

まるで御伽話の中にいるみたいだ。朝の優しい風が微かに頬を撫で、金色の光が小さな町を満たす。そんな場所を自分が歩いてゆくのは不思議な気分になる。

やがて坂の曲がり角に小さな表札をぶら下げた家が見えた。水色の

表札、朝露に少し濡れた清々しいほどのスカイブルー。

私のトランクの一番底には同じ色の本が入っている。色褪せてはいるし、手垢にも塗れているだろう。小汚ない空色のバインダー、だ
が色褪せない思い出が詰まったバインダー。

ローマ字の読み方の下に白いペンキで“橘”の文字が見える。習字
の時間に見慣れた達筆な筆文字。

思わず懐かしさに落涙しかけて天を仰ぐ。

朝日は上りきり、黄金の光は終息に向かい、少しずつ青みを帯びて
いくイタリアの空。

鮮やかな、鮮やかな……

大切な私の愛しい、

そして私は静かに呟く。

「スカイブルー」と。

そして思う。

貴女に言いたい言葉が見つかりました。先生。

今なら、大人になった今なら判るんです。あの時期がどれぐらい私
にとって価値あるものだったか。そして、私に未来を選ぶ力と精神
を与えてくれた貴女がいなければ、今の私はいません。

先生。私は選んで来ました。したい事好きな事、心に忠実に、そしてこれからも選んでいく。

命が終わる時まで、ずっと……。

こうやって、私という名の空は広がっていく。

感謝の気持ちを言いたい。十年前とは違う別の言葉で……巧くは言えないけれども。

胸の高鳴りを抑え、そつとベルを鳴らす。

朝の風、露の匂いそれら全てを限り無く広がるスカイブルーの空が包み込む朝……。

私は此所にいる。貴女への精一杯の感謝で胸を一杯にしながら……。

(後書き)

あまりいい出来とは言えないのですが、ここまで読んでくださって有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960k/>

Blue sky

2010年10月9日00時24分発行